



第三十二回「恋する十四松」とM-1グラフィックプリ

考え

まず自分が面白い物を
互いに笑い合える幸せ

弦楽器イルカ  ⇒ 友人

この前喫茶店で、隣にいた男性がこんな電話してた。

うん、俺としてはね、もうバルスを唱え終わっちゃった後のラピユタなの。そう。『天空の城ラピユタ』に例えるとね。知ってる？ だよ。祭りにもなるよね、バルス祭り。

いや、つまりね、バルス唱え終わって、ラピユタが崩壊して、ムスカもメガネメガネして落ちちゃって、結局ラピユタはテト（キツネリス）とかロボット兵を乗せて、更に上の天空へ昇ってくよね。

俺はパズーとしてそれを下から、ドーラの空中海賊団とか、シータと一緒に見上げて、手を振ってるワケ。ありがとうラピユタっつって。

そう、かかっているかかっている、後ろで井上あずみの「君をのせて」かかっている状態ね。ある意味、チェックメイトみたいなね。ドーラと息子たちが手柄の宝石を見せ合ったりしてね、ニヒっつって、これから地上で楽しく暮らしていきましょうってね。

そういう状態なの、つまり今。良いこともあった。辛いこともあった。いろいろ乗り越えて、やっとラピユタにサヨナラできる。新しい人生に向かう気持ちになった。

その状態でさ、今、君ともう一回やり直すってのはさ、つまりいきなりパズーが、「それじゃ僕、もう一回ラピユタ目指します！」って無邪気に言い放つようなもんだよ。エンドロールも半ばにしてさ。まだ宮崎駿って監督のクレジットも出てない状態で。そうそう。電通、とかも出てないよ。電連絡んでたよね、博報堂か？ どうせどっちかだから。広告代理店の天下だから。原発も政治もみんなシナリオできちゃってるから。まあそれはいいんだけど。

「は？」ってなるよね、みんな。何言ってるのこイツ、もう終わったじゃんそのくんだり、もう一回ラピユタ追いかけてどうしたいの？ 御釜にこびりついた米粒みたいな、ちょっとだけ残ってる宝でも漁りにいくつもり？ コスいやツだな、って目で見られるよね。ロマンの欠片もないよね。

みんなシラーってなるし、シータとか「何言ってるのアンタ」ってもはや女房気取りで罵りかねないよね。「アンタあたいと一緒になるんだろ、その気なんだろ？ すっごいチラチラあたいのこと、要所要所でヤラシイ目を見てたじゃない。バルスの時、必要以上に手をベタベタ握って来てたじゃない。嫌なのかい、あたいと一緒になるのが嫌でそんな世迷言、言ってるのかい。どんだけ夢見る少年なんだい」って、もう呆れすぎてドーラの口調より汚く罵声浴びせてくるよね。きつと、絶対。

俺と君はパズーとシータにはなれなかった。パズーとラピユタだった、残念だけど。でもそれはそれで、パズーはシータと、テトはロボット兵とさ、仲良くやっていくしかないじゃん。

そこで『ラピユタ2』なんてさ、続編作ってもすっごいヒンシュク買うだけよ。蛇足もいいとこじゃん。もう終わってるのに。もう一回パズーがラピユタ追っかけて、木の根っこに引っかかっている宝石を目ざとく見つけて、ニヒっつってさ。ちびっこゲンナリだよ。

え、知らないよ、ラピユタがあの後どうなるかなんて。まあ、より高く昇ってくよね。え、宇宙に出ちゃうってことはないと思うけど。凍っちゃうとか？ 燃え尽きちゃうとか？ いや、たぶん

、良い感じのところで止まって、うまくやってくと思うよ、ラピュタのことだから。みんなそこ心配してない。うん、うまくやってける。大丈夫。安心しな。それじゃ。

いや、もちろん、全部俺が今考えた嘘なんだけど。

さて、今回はこんな感じの本当にどうでもいいネタを書きたい。最近流行りの『おそ松さん』の「恋する十四松」を観ててさ。自分のギャグで相手が笑って元気になる、それがうれしくて自分も元気になるってのは、お互いに存在を必要として受け入れる、お互いの承認欲求を満たし合う状態だなって改めて思った。前の恋愛の回で書いたヤツね。一方が笑いを与えるだけじゃなくて、双方向で笑い合っってうれしいのが重要だね。

今更ながらこの前のM-1で、俺はハライチのネタに興味を覚えた。知名度もあるしもうタイトルはいらないコンビな気がするけど、あの舞台であえて、漫才でもっとも基本的ともいえる誘拐ネタに挑戦するって、ちょっとすごくない？

んで、途中まで結構楽しく観てて、最後の方で、あ、もう一歩ってとこがあった。

「このままだと息子さんはタダじゃすみませんよ」「え、息子をどうするの？」「息子さんをそれはそれは大事に大事に育て上げて、そっくりそのままお返しします」「え、それじゃ過保護になりすぎちゃう。普通でいいんです、うちの子は普通が一番いいんです」って感じの流れで、どういう風に育てるかってなるんだけど、その後がね、結局なんかちびまる子ちゃんみたいな話になって、こたつで寝てるとこを起こさずに布団へ運ぶとかってくだりになってくんだけど、ちょっとベタなあるあるになっちゃってもったいなかった。

想像の翼を広げて、例えばこれをさ。

「8歳でハーバード大を卒業させて、10歳でIT企業の社長にさせます」

「うちの子プレゼンしちゃうの？ 10歳で、黒のタートルネックとジーンズで？ 新製品の紹介とか、熱のこもったゼスチャーで、スタンディングオベーション浴びちゃうの？」

「12歳でNASAに抜擢され、14歳で宇宙飛行士にさせます」

「宇宙行く？ たけちゃん宇宙行っちゃう？ 家族誰一人、まだ旅行でさえ関東から一歩も出たことのないうちから、いきなりハワイやら海外ぶち抜いて宇宙飛び出しちゃう？ 宇宙からの第一声は？ ハワイよりフワフワしてますって？」

「15歳で政治家になり、16歳でアメリカ大統領にさせます」

「わーお。アジア人初の、合衆国初代、アジアンたけし大統領。町内会長でさえなかったことないうちから、先祖代々小作人だった家系から、出ちゃうの。あんれま、ご先祖様、腰抜かすだあ。日本の総理大臣でさえ、ない話なのにな、ゆないてっどすていつおぶあめりかで、なっちゃう、オバマになっちゃう。あら、小浜市に連絡しなきゃ、うちが引き継ぎますって、早く小浜市に交代の電話しないと。もう混乱してワケわからない。ああ、無理、そんな子を返されても、どう接していいかわからない。納豆とか食べるかしら。金箔入れないとまずいかしら。まずなんて呼べばいいの、様？ 様つけたら足りるかしら？ 我が息子なのに、たけちゃんじゃなくて、たけちゃ

ん様？」

「18歳でヨーロッパの王女と結婚させます」

「あ、様じゃ足りないやっぱ。たけし王子。たけし皇太子。もう閣下ね。デーモンたけし閣下ね」

「20歳で2万20歳の悪魔にさせます」

「合ってた。閣下合ってた。来ると思った悪魔の閣下」

みたいのがほしかった。残念ながらこのくだりでちょっと失速してた気がすんだよね。ちょっとのひねりで決勝行けたんじゃないかと。チャレンジングだったのにもったいない。

んで最後ね。年末に言ってた将棋の漫才の方がまずできた。わかりやすくおぎやはぎのあて書きにします。彼らの例の「～ですがなにか？」から「おぎの願いは叶えてやりてえんだよな」のところは省略ね。

おぎのセリフから。

「うん、将棋の棋士になりたい」

「あ、指す人ね、将棋を。羽生名人とかね」

「あ、羽生さんはね、俺ムリ。頭いいから。あんなに俺頭良くないからムリ」

「うん、それ言ったら全員頭いいよね。棋士の人。バカな人、一人もいないよ」

「そうだけど。そうじゃなくてね、よくあるじゃん漫画とかで、駒の音が聴けるようなさ。頭で考えるんじゃなくて、直感で、駒の音を聴いて将棋を指す棋士になりたいの」

「え、どんな風に聴くの？」

ここで、お騒がせ号泣議員の物真似のくだりをいれてもいい。

次やはぎから。

「やめよ、そういうの。時事ネタは。爆笑問題になっちゃうから」

「とにかく俺が駒の音を聴く棋士になるから。やはぎは王手してきてほしいの。それを俺が駒の音を聴いて、逆王手にするから」

「わかった。王手って、次に王を取って勝つぞってことね。それを切り返しながらか、逆に敵の王をとるぞって、一番難しいヤツね。んじゃ、王手！」（王手のゼスチャー）

「え、そこ王手？」

「うん、だって王手しろって言ったでしょ？」

「あちゃー。参ったな、ヤバいな。参りました」

「待って、参らないね。そこ参らないでね。まだ聴いてないし、駒の声」

「あ、そっか、聴くの忘れてた。俺、直感の棋士だから、結構いろいろ早とちりしちゃうから。今朝の朝ごはんも目玉焼きにソースかけて、あれ、醤油だと思ったらソースだって、でもうめえつつって」

「待って、そのくだりいる？」

「うん。芝居だから。直感の棋士はね、ちょっとおっちょこちょいだから。そんなくらいじゃない

と駒の声なんて聴けない。バカだからさ、ある意味。何本かネジ外れてないと駒の声なんてバカバカしくて聴いてらんない」

「それ自分で言うんだ。でもおぎ一流の演出なんだね。うん、じゃ俺は触れない。おぎの演技プランを尊重するよ」

「よし、聴いてみっか。どれどれ、教えてちょ。我が駒の精霊たちよ。話してミソ」

「うん、確かな手ごたえのバカだね」

「なになに、うんうん。あいわかった！」

「あ、わかったの？」

「うん、あのね、今やはぎ、これ金で王手してるじゃん。この金、さっき俺から取ったヤツだよ。4五歩から」

「そうだね」

「この金ね。泣いてる」

「え？」

「だってね、この金は、3八飛車から王を守ったりね、逆に7二角から攻めあがったりね、陰に陽に我が軍を支えてきたワケじゃない。それがさ、ぱっと一回やはぎに取られただけで、逆に我が王に王手するよなね、そんな子じゃないワケ。謀反なんて考えてもなかったのに、それが悔しいって。だから、こうね。逆王手！」（目の前の駒をクルッと回転させ味方にするゼスチャー）

「え、なにその手？」

「（女性の声色で）後手、3二金、ひっくり返す」

「ないよね。そんな手は。それルール変わっちゃうから。将棋のルールじゃないから」

「だって駒の声なんだから仕方ないじゃん。もうヤダって。だったら実家帰りますって言うてんだから」

「言っていない。いやたとえ言っていたとしても帰さない。反則だから。ひっくり返すのなしだから。声を聴くにしても、ルールの範囲内でだよ。いい？」

「でも、駒あつての将棋だからね！ やはぎこそ、もう駒が泣くような手は打たないでよ！」

「あ、俺の方が責められるんだ。この期に及んで。じゃ、気を付けるだけは気を付けるよ。もう一回。王手！」（王手のゼスチャー）

「あちゃー。参ったな、ヤバいな。参り……」

「そこも省略ね」

「はいはい。んじゃ、（駒の声を聴くゼスチャー）なになに、はいはい、そうですか。あいわかった！」

「え、今度は何？」

「この金ね、さっきからなんで謀反して王手ばっかしてる困ったちゃんなのかわかりました」

「いや、王手してっておぎが言うからでしょ？」

「ちがう。やはぎ、その前の手で俺から飛車と角取ったじゃん」

「あ、そうなんだ、飛車角取ってんだ俺。てかその前に超弱くない？ 駒の声を聴く棋士。もう金

以外に飛車角まで取られて、既に負けたようなもんだよねそれ」

「うん、それがね、あの飛車と角は、この金の父と叔父にあたる駒だったんだよ。それでね、それが人質、あ、駒質に取られてるから、この金は泣く泣く俺の王に王手してるって。そういう複雑な家庭環境に育った子だったんだね。不憫な金だよ」

「いや初耳だよ、俺そんなつもりないし。駒質っても初めて聞く単語だし」

「でもね、我が王のために、駒質の飛車角がついに覚悟を決めたって。だから、こうね。逆王手！」（右手でズバッ、左手でズバッ、斜めに斬るゼスチャー。それから真ん中の駒を逆向きにするゼスチャー）

「なにその手！」

「（女性の声色で）後手、3二金、泣いて飛車角を斬り、ひっくり返す」

「おぎ。わかった」

「なに？」

「おぎに棋士は向いてない。目指さない方がいい。俺と漫才やるんでいいじゃない。それが一番うまくいくよ」

「そっか。じゃ、あんたとはやっとなんわ」

「ありがとうございました〜」

さて、今回はこんな感じ。リラックスして書けました。

どうかな？



考えるウマシカ～第三十二回 「恋する十四松」とM-1グランプリ～

<http://p.booklog.jp/book/105585>

著者：弦楽器イルカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105585>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105585>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ